

⑧ 日野郡の取組

1 研究仮説

運動の特性をふまえて運動の楽しみ方や学習内容を明確にし、様々な視点から課題をどうすれば解決できるかを児童に考えさせながら学習に取り組みさせることで、運動の楽しさを味わいながら技能や問題解決能力を習得できるのではないかと考えている。

日野郡では、以下の視点を基に体育学習の充実・発展を図ってきた。

◎研究の視点

- 1 運動の特性を生かした学び
 - ①運動の楽しみ方及び学習内容の明確化（何を学ぶか）
 - ②運動の楽しさに迫る解決方法の工夫（どのように学ぶか）
- 2 運動の価値を実感できる学び
- 3 『する・見る・支える・知る』の多様な関わり方と関連づけた学び

2 主な活動

(1) 郡小体研総会（新型コロナウイルス感染症予防の為、紙面にて実施）

- ・令和元年度事業・会計報告
- ・令和2年度研究推進計画の決定および役員選出

(2) 研究推進委員会

- ・令和5年度鳥取大会領域別分科会発表「陸上領域」へ向けた取り組みの協議
- 7月31日 根雨小 研究の方向性の検討
- 8月21日 根雨小 研究の方向性の検討

(3) 授業研究会

11月30日 江府小体育館

6年「Rey!Wa!JUMP ～みんなでこえろ75センチ～（陸上運動）」

授業者 稲田 修士 教諭（江府小）

指導助言 鳥取県教育委員会事務局 体育保健課 綱本 大介 指導主事

※新型コロナウイルス感染症予防の為、授業をビデオで撮り後日指導をしていただいた。

(4) 全体研修・反省会（2月）

- ・今年度の研究のまとめと活動の反省、今後の研究推進について

3 まとめ

昨年度に中・四国小学校体育研究大会（徳島大会）において、恵比奈宏志教諭が日野郡の代表として、領域別提案（体ほぐし運動）の実践発表を行った。本年度は、日野郡内の4つの小学校が取り組んできた実践を引き継いで、令和5年度中・四国小学校体育研究大会（鳥取大会）領域別提案（高学年陸上領域）に向けて、理論研究や授業実践を行った。新型コロナウイルス感染症予防の為、授業実践は1回しかできなかったが、その中でも運動の特性を生かした授業構成やキーコンピテンシーの育成、ICT機器の有効な活用など様々な収穫があった。来年度は、授業実践をさらに重ね、日野郡の研究を深めていきたい。

実践事例①

Rey!Wa!JUMP
 ～みんなでこえろ75センチ～ (陸上運動)

江府町立江府小学校 稲田 修士

1 はじめに

走り高跳びは、リズムカルな助走から力強く踏み切って跳び、バーを跳び越して着地する動きの中で、自分の目標とする高さを跳び越えることに面白さや楽しさがある。また、バーを低い位置から高い位置に変えていくという、条件の難易度を上げていく中で、新たに設定した高さを跳び越せるようになったときに喜びを感じることができる。助走や踏み切り、空中姿勢や着地と局面毎の動きが明確であるため、自分の動きを走り高跳びの連続図や手本の動きと比べることにより、動きのポイントを見付け、そのポイントを踏まえ、自分の課題を明確にすることができる運動である。

本学級の児童は、体育学習や運動が好きな児童が大半を占めているが、事前のアンケートでは、「走り高跳びは好きですか」という質問に対して、「はい。」ではなく、やや肯定を示す「どちらかといえば、はい。」を選んだ児童が半数以上であった。その理由としては、「跳ぶ運動は苦手。」「バーに当たると痛いから。」といったものが見られた。こうした実態を踏まえながら、走り高跳びの運動が持つ楽しさや喜びを児童がしっかりと味わうことのできるような実践にしていきたいと考えた。

2 学びへの働きかけ

(1)単元目標

- ・走り高跳びの行い方を理解し、リズムカルな助走から力強く踏み切って、走り高跳びができるようにする。 【知識及び技能】
- ・走り高跳びの動きの中で助走、踏み切り、振り上げ足の動きのポイントを踏まえ、目標とする動きと取り組んだ動きを比べて自分の課題を見付け、課題に合った練習方法を選び、考えを伝えることができるようにする。 【思考力、判断力、表現力等】
- ・積極的にグループでアドバイスし合い、安全に気を付けながら、走り高跳びに取り組むことができるようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

(2)単元計画

	1	2	3	4	5	6	
学習活動 (【わかる・できる・ためす】 /【いかす・チャレンジする】) ・オリエンテーション ・準備の仕方、安全な活動の仕方 ・試しの記録会		<やってみよう>輪とび (ケンパー遊び)		イチ・ニのリズム	3歩跳び	リズム高跳び	
		活動① 高く跳ぶポイントを身に付けよう!			活動② 「より高く!より美しく!自分の記録を伸ばそう!」		
		助走 <活動①> 助走のポイントを見つけて自分の動きに取り入れる。 <活動②> 共有した知識を場の工夫をして練習する。	助走距離 <活動①> 既習の助走に合った自分の助走距離を見つける。 <活動②> 記録測定 (中間)	踏み切り <活動①> 踏み切りのポイントを見つけて自分の動きに取り入れる。 <活動②> 共有した知識を場の工夫をして練習する。	課題別グループに分かれて、練習を行う。 <場①> 助走の場 <場②> 踏み切りの場 <場③> ぬき足の場 <場④> まとめの場	令和ジャンプ 記録会 みんなでこえろ75センチ!	
	まとめの動画撮影・振り返り						

(3) 授業の視点

①指導のポイント 「育てたい資質・能力に合わせた学習形態」

個々の課題に対する主体的な学びがより活発に進むよう、3～4人のグループを作り互いに協力したり、アドバイスをし合ったりして学習に取り組むようにした。単元はじめての記録会における記録を元に、記録および既習による技能の定着の度合いでグループを分けることで、グループでの課題解決の質を高めるとともに、低位の児童の支援にもつながると考えた。



また、走り高跳びが持つ特性から、児童は自然と個々の記録の伸びや他者との競争を意識して学習に取り組むであろうと考え、他者と共に支え合い高め合う児童の育成を目指し、学級全員の記録の合計がどこまで伸ばせるかを目標に据えて学習に取り組むようにした。

② ICT機器の活用 「情報の活用・自己の動きの変容認識・学習評価」

本単元では、体育学習の効果を向上させる目的でICT機器を以下の3通りの場面で活用した。

・課題解決につながる情報の活用

タブレット端末を活用し、Web上の情報や私たちの体育の資料を積極的に活用する。児童が持つと思われる課題を教師が想定し、事前に課題解決に活用できそうなものを取捨選択しておくようにした。



・自己の変容を認識するための活用

タブレット端末の動画撮影機能を活用し、児童が自分や友だちの動きを明確に捉え課題解決の的確なアドバイスを発信したり受け取ったりすることが可能になるようにした。また、授業支援アプリを活用し、毎時間の各自の動きを動画で記録しておくことで記録の伸びだけでなく、自分や友だちのより良い動きへの変容に気付くことができ、運動が持つ楽しさや喜びにもつなげたいと考えた。



・学習評価のための活用

毎時間の動画を記録することは、児童が動きの変容を味わうことのみには生かされるのではなく、教師が児童の見取りをより適切に行い、その後の授業改善や確かな学習評価の面においても有効に活用できるようにした。

③ 教具の工夫 「運動時間の確保と安全への配慮（恐怖心の解消・軽減）」

毎時間の練習の場では、グループごとに簡易の支柱を準備し、運動量を確保していく。バーの代わりにゴムひもを使用し、ゴムひもの両端は洗濯ばさみで支柱に取り付けるようにした。児童が跳び越える際にゴムひもに引っかかった場合に簡単に支柱から外れ、支柱転倒による事故防止を図った。



また、事前のアンケートに挙がっていた、「バーに当たると痛いという児童の恐怖心を軽減する目的で、記録測定時のバーは、芯の部分に竹にして軽量化を図り、その外周にパイプなどの保護に使うスポンジのカバーを巻き接触時の痛みを和らげる工夫をした。

④ 単元における「する・みる・支える・知る」の視点

児童が将来、生涯にわたって、ライフステージに合わせた多様な運動・スポーツの楽しみ方を知り、運動に親しみ、心身の健康の保持増進を図ったり、他者や地域とのつながりを持ち、スポーツを介してコミュニティを形成したりするスポーツライフの実現を目指すことができるようにしたい。そのために本単

元において、以下の見方・考え方を働かせることで、様々な運動に興味を持ち、より広い視野のもとで、どうしたらよりよくなるのかと、身体を使いながら考え、友だちとアドバイスを送り合いながら課題に向かっていく児童が育成されたと考えた。

「する」・・・走り高跳びをすること、自分の体の動かし方をつかむこと。

「みる」・・・友達の動きを目で観察し、ICT機器を用いて自己や友だちの動きを分析することで、よりよい動きや課題を発見すること。

「支える」・・・運動の準備をしたり、安全な場をつくったりすること、また、友だち同士、アドバイスし合い、応援し合って高め合うこと。

「知る」・・・世界や日本のトップジャンパーの姿や、同年代の児童の跳躍の姿を見ることで、動きの相違点を知ること。

3 成果と課題

【成果】

・ 教具の工夫では、グループごとに簡易の高跳びセットがあることで、運動量の確保と運動を繰り返すことで生まれる技能の獲得に効果が得られていたと考える。また、はじめの記録会に比べ、まよめの記録会ではバーの直前で減速してしまう児童が大幅に減ったことから、児童の恐怖心を軽減する目的で行ったバーの工夫も効果が得られたと考える。事後のアンケートからも、「バーが当たっても痛くないので安心して跳べた。」という意見が挙がっていた。



・ ICT機器の活用では、毎時間の各自の動きを動画で記録したことで、自己や友だちの動きをその都度確認できただけでなく、単元のはじめと終わりの自己の動きが比較できたことで、記録の伸長だけでなく、自己の動きの変容という、体育学習の持つ楽しさや喜びを味わうことができた児童が多くいたことが成果と言える。また、児童の動きを記録した動画を教師も活用することによって、その後の授業改善や学習評価は確実によりよいものとなった。

【課題】

・ 助走の学習を終えた時点で中間の記録会を行ったが、学習した助走の方法を理解はしていたものの、それを活かすことができず、動きにつなげることができなかったこともあり児童の記録が軒並み下がってしまった。このことで、意欲や達成感が一時的に下がってしまったことから、記録の伸長が難しい走り高跳びの学習においては、単元計画の見直しが必要であると考えた。

・ ICT機器を活用し様々な情報をもとに課題を解決する学習を設定してきたが、与えた情報が複数あったために、児童の学ぶ視点が明確に定まらない場面が見られた。情報を教師が選択しておくことはよかったと考えるが、学習の目標に合った情報をより絞った形で提示する必要があると考えた。また、動画撮影機能の活用は、いつどこで行うのかを明確にしておかなければ、動画の撮影や確認に時間を使ってしまい、体育で最も大切な運動時間の確保の妨げになってしまっていたと考える。